

袖ヶ浦高校(千葉・県立)
2学年主任

石川陽一 先生

＼ ファシリテーター ／

筑波大学人間系
教授

藤田晃之 先生

飯野高校(宮崎・県立)
キャリア支援部長

梅北瑞輝 先生



新庄神室産業高校(山形・県立)
教頭

延沢恵理子 先生

浦和高校(埼玉・県立)
進路指導主事

菅野治虫 先生

Discussion & Explanation

データから考える これからの進路指導

ここまでの特集では数々のデータを通して、急速に変化する社会環境を紹介しました。
こうしたマクロな情報は、目の前の生徒の進路指導にどう影響するのか、しないのか。

「座談会編」と「解説編」の2部構成で考えを深めます。

取材・文／堀水潤一 撮影／平山 諭

マクロデータから見えてくること、 見えてはこないこと

PART1「座談会編」では、キャリア教育が専門の筑波大学 藤田晃之教授をファシリテーターに迎え、編集部が提示した各種データを基に、4人の先生に本音をぶつけていただきました。

未来志向の言葉と、仄暗さを 感じさせる社会状況の狭間で

藤田 本日は進路指導経験豊富な4人の先生にお集まりいただきました。編集部が提示するデータ(9〜23ページ)を基に、それぞれの現場で感じていることや課題、違和感について意見交換をしたいと思います。具体的なデータに進む前に、学校紹介を兼ねて、普段、生徒にどのようなメッセージを発しているかお聞かせください。

石川 千葉県立袖ヶ浦高校は1学年7クラス中、大学・短大進学が4、専門学校進学が2、就職が1クラスという進路多様校です。どの道を進むにしても選択肢を広げるのが学力だという思いの下、私が年次主任を務める2学年では「学力の向上が君の未来をつくる」というフレーズを掲げています。多くの卒業生が地元に残りますが、人口が減少し地域が疲弊するなか、生徒の地域参画意識をどう育てるか

が個人的な課題で、85人という学校最大勢力のボランティア同好会を中心に積極的に地域貢献活動をしています。

梅北 本校(宮崎県立飯野高校)も、難関大進学者から就職する子までいて、いかに生徒に合ったキャリア形成を後押しするかを常に考えながら支援しています。地域と協働した学びを続けてきましたが、最近は国内外で活躍する生徒も増え、探究部会では「グローバルヒーローの育成」を掲げ、地域に根ざしつつグローバルな視点をもった人間の育成を目指しています。本日着てきたTシャツにプリントされた「答えがないから、おもしろい」などのコピーも生徒と共有しています。

延沢 去年まで開校から10年間、県内初の中高一貫校に勤務し、今年から山形県立新庄神室産業高校の教頭になりました。これまで経験してきた進学校から一変し、飼育している牛に赤ちゃんが生まれたとか、生徒が育てた野菜等を売りに来る環境の中で、

「人が育つ環境って多様だな」と思いながら過ごしています。

前任校の学年運営で大事にしたのは「仲間が勇気」という言葉。違う小中学校から集まる思春期の6年間、新たな挑戦の連続です。そのため、仲間の姿に学び、自らも誰かの勇気になり得る行動をとれるよう、安心して挑戦できる文化をつくってきました。



菅野

埼玉県立浦和高校は、ほぼ全員が難関大学を志望する男子校です。昨年からは進路指導主事を行っています。が、いわゆる職業教育的なキャリア教育を行っているわけではありません。ただ、大学受験がゴールではないというスタンスは一貫していて、その先の社会でどう活躍し、貢献するかに主眼を置いています。本校が目指すのは「時代の求めるリーダー」。そのためには高い志が必要ということで、各界の一線で活躍する方々を招いての進路講演会など、リーダーの存在を肌で感じられる仕掛けを多くしています。

マクロデータを進路選択に 活かすことの意義と違和感

藤田 立場は異なれど、共通して未来志向の言葉を掲げられているわけですね。なぜ、こんな質問をしたかというと、生徒の未来に期待する一方で、編集部が提示するデータは明るいものばかりではありません。データが

図1 2040年の労働需給ミスマッチ予測(職種間)(再掲)

		専門職	うち、AI・ロボット等の 利活用を担う人材	事務職	現場人材	うち、 生産工程従事者
2040年	需給 ミスマッチ	-181万人	-339万人	437万人	-260万人	-206万人
		▼	▼	▼	▼	▼
	需要数	1,867万人	782万人	1,039万人	3,283万人	731万人
	供給数	1,686万人	443万人	1,476万人	3,023万人	525万人
2022年	就業者数	1,288万人	236万人	1,455万人	3,637万人	835万人

※出典など詳細は11ページを参照

示す仄暗い未来と、目の前の生徒の進路選択をどう繋げばいいのか。例えば、エッセンシャルワーカーやAー人材等の不足(上図1および10ページ図3)について意見を聞かせてください。

菅野 示されたデータ自体は「確かに、そういう社会状況になっているな」という認識です。ただ、生徒がそうした社会認識をもったうえで進路を考えているかというとも言えません。

というのも浦和高校では、高校生活に全力投球することを最優先にしています。生徒だけではなく、教員も同じ考えで、高校時代ならではの多様な経験に熱中した先に「では将来どうしよう」という問いが出てくるのであって、データに影響されて進路



袖ヶ浦高校(千葉・県立) 2学年主任

石川陽一先生

いしかわ・よういち ●長年進路指導を担当し、前任校では進路指導主事として就職指導に尽力。進路多様校を中心に現在6校目。現任校では総探研究委員として、地域参画型の総探プロジェクトを仕掛け、地域と生徒を繋ぐ実践を推進する。地歴公民科。ボランティア同好会顧問。



地域と地域に残る生徒を繋ぐのは
多分私たちにしかできないこと

を選んではいないように思うのです。

延沢 本校に限らず主体性尊重の現在の教育の流れのなか、個人のやりたいこと(ウィル)を重視する状況にあって、「社会がこう変わっているから、こうしなければ」(マスト)となりがちな教育的アプローチは難しいというのが率直な感想でした。もちろん、社会の変化や業界の動向といった事実は、判断材料として伝えていますが、それと本人の希望は必ずしもマッチしないこともありますし、労働需要のある仕事を強制はできません。

そもそも「やりたいこと」って、知っていることの中からしか生じない。だから「本物」にたくさん出会わせ、体験を積みませ、知っている世界を増やしてあげることが大切かなと。そうしたなか、「自分もやってみたい」「人の役に立つってかっこいい」といった感情が原動力になると思っています。

藤田 重要な問題提起をいただき、ありがとうございます。社会の実態を知らないことには、するべきことは生まれにくい。とはいえ、「こういう現実だから、こうするべき」

では生徒は動かない。むしろ、データより感情で動く、ということですが、石川先生はいかがですか。

石川 難しい問題です。というのも、地域にある介護施設や医療機関は、当然のように人手が足りていません。以前の勤務先の市原市は日本一ゴルフ場が多い自治体なのにキャディさんの成り手がなく予約を断らざるを得ない状況だそうです。企業の求人担当者から切実な声が届きますし、現実問題としてインフラを支える人材がいないと地域は成り立ちません。生徒や保護者には、そうした事情を伝えていますが当然無理強いはできません。それと、最近は知名度や給料で就職先を選ばなくなりました。多くの男子生徒は、京葉工業地域にある大手の石油製鉄関連企業に就職しますが、「休みが取りやすいか」「パワハラはないか」といった職場環境に敏感で、自分にとつての働きやすさを重視します。

梅北 人手不足は同感で、就職する生徒は20人足らずなのに2000件以上の求人票が届きます。高卒・無資



社会の複雑さを、複雑なまま、
わかりやすくすることなく伝えたい

格でも大卒並みの初任給を提示する企業も少なくありません。大学全入時代と言われるなか、安易に進路を決めず、その先の生き方をいかに考えてもらうかが課題です。とはいえ高校生にとつて先のことはピンとこないため、社会がどう動いているか体感してもらおうと、キャリア教育をふまえた探究に力を入れてきました。当初は「どうすれば過疎化を止められるか」といった社会課題を軸にしていたが、大人が生み出した暗い話題に、子どもたちはコミットしがりません。そこでもっと身近かつ未来志向で「自分の関心のあることで地域にアプローチしたら何が起こるだろう」という方向にシフトチェンジしたんです。すると小さな町ですから、すぐ反応が返ってきた。自分の強みやアイデアによって誰かが助かる体験ができ、自己効力感にも繋がります。日本財団の18歳意識調査で「自分の行動で国や社会を変えられる」と答えた割合の低さが話題になったことがありますよね。うちの生徒に同様の質問をすると、

その割合は非常に高いんです。

菅野 本校でも、以前、進学校を対象に行われた専門家の調査で興味深い結果が示されました。学習時間が増える要因を尋ねたところ、「勉強内容と実社会の関係がよくみえたとき」に、他校と比較して学習時間が有意に増える傾向が見られたんです。考えてみると、「将来、××に貢献したい」という気持ちがある具体的ななり、覚悟が決まると、自分で必要なデータを集めて判断し始めるんですね。先ほどの話で言うと、データを起点に気持ちは動かなければ、動いたときにその気持ちを固めるのがデータという順番な気がします。ただし、SNSなど有象無象のデータも多いため、「それはどこから出てきたデータなんだ？」と出典を問うような指導は必要になります（笑）

延沢 データに対するリテラシーが低いのはあるあるですね。ただ、そう言う私自身、昨年まで2年間、大学院で学んだことで反省しました。学部時代とは異なる量的研究をするため、統計学を学び直したんですが、いかに

統計を表面的にしか見ていなかったかに気づかされました。例えば、文部科学省から出された統計データについても、算出方法や公表の仕方地域差がないように見えるものや実態に合わないものもありました。国は立場的に一斉号令の形しか取れません。地域ごとに進路指導の体制も違うのに、受け手が深く読み解こうとせず、「どこも同じなんだ」って全国一律の号令のような受け止め方をしてしまうのは危険なことですよ。公のデータだとしても、目の前の生徒とどうすり合わせるか、現場が個々に判断できる力をつけることが大事だと思っています。

年内入試の拡大から考える 高校教育の本質

藤田 「社会と労働市場」に関するデータを基に深い議論に発展しました。続いて、先生方にとって、より身近な「高校生の進学と就職」（14〜18ページ）の話題に移ります。例えば「年内入試の拡大」（次ページ図2）について思うところはありますか。

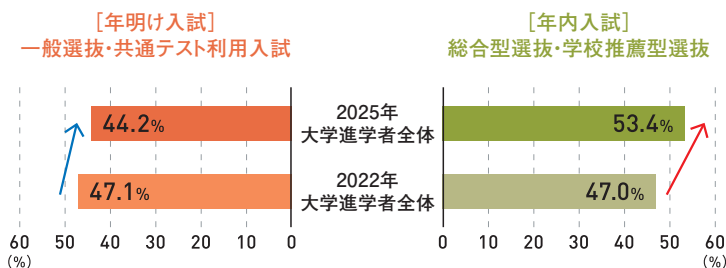
石川 本校では大学進学者の8割以上が年内に進路を決定します。「本当に採点しているの？」と感じざるを得ない一部私学もあり、モヤモヤも抱えています。制度がそうになっている以上、いかに卒業まで学習意欲を維持



飯野高校（宮崎・県立）キャリア支援部長
梅北瑞輝 先生

うめきた・みずき ● 前任の通信制高校でキャリア教育の重要性を実感。宮崎県西端えびの市唯一の公立高校である現任校でキャリア支援を担当し、探究活動を柱とした学びづくりを牽引。留学支援・外部連携も担当。指導教諭。地歴公民科。宮崎大学地域資源創成学部 客員研究員、地域団体APEえびの代表など校外でも積極的に活動。

図2 進学する大学の年内・年明けの入試比率(再掲)



※出典など詳細は16ページを参照



過去をふまえ、未来も見ながら、
今、大切なことは何かを共に見たい

させるかという指導にシフトしなければいけません。ただ、良い面もあつて、うちの生徒に限って言えば、年内入試で進学した卒業生が中退した話はあまり聞きません。安易に選んでいるわけではなく、自分の学力や学びたいこ

と、家庭の経済事情まで何度も相談しながら、最終的に自分で志望先を決めたわけで簡単には辞めないのです。**梅北** 年内入試が大学生活に及ぼす影響に興味があり、追跡調査を始めていますが、高校時代に探究でも勉強でも、しっかり取り組み、走りきった生徒は、入試の形態にかかわらず、入学後高い成績を維持し、活躍もしています。卒業時点の学力だけでは測れない力が育っていることを実感しています。**延沢** 一方で、進学校の先生方は生徒を多面的に見てもらえるはずの年内入試になんとなくモヤモヤを抱えている気がします。それがどこからくる感情なのか気になっていたんですが、大学院での研究の一環で、都市圏と東北地方の進学校の先生に「少子化における大学入試の変化に対する考え」を尋ねたところ、地域にかかわらず「学力保障」を重視する考えが上位に挙がりました。年内入試に対するモヤモヤに名前を付けるなら「もっと伸ばせると信じている生徒たちに卒業直前まで勉強を続けさせずに、中途半端なまま受験さ

せてしまうことに対する抵抗感」なのかもしれないなと思っていました。

菅野 浦和高校では年内入試を利用する生徒は数えるほどです。年内入試が行われる時期から、3月の一般入試直前にかけての学力が伸びることを、生徒自身が実感していることも一因だと思います。加えて、本校では受験だけを特別視せず、受験と同じように最後まで学校生活を大切に行っています。なにしろ共通テスト直前の12月にクラス対抗ラグビー大会があり、11月から全クラスで朝練を始めるほど。今後年内入試の拡大によって、3年生がラグビー大会を全力で楽しめなくなるなら、そのほうが問題となりそうです。

進路相談の相手として

「先生」が上位にくることの意味

藤田 編集部が今回実施した卒業生への調査では「進路選択に際して最も影響を与えた人・情報」として、「母親」に次いで「高校の先生」が挙がっています。また、先生と十分に話し合えた層は、進路決定の納得度が85%以上というデータも示されました(22ページ図3・4)。先生方にとって誇っている数字だと思いますが、いかがでしょうか。**梅北** 納得感をもって進路を決めた生徒が多い結果に安心しました。進路情報の適切な提供と生徒の希望をふまえ



新庄神室産業高校(山形・県立) 教頭

延沢恵理子 先生

のべさわ・えりこ ●教員生活のほとんどを進路指導担当として過ごす。前任校では開校から10年間、県内初の中高一貫校に勤務し、6年間2期生の学年主任を担当。昨年までの2年間、地域格差研究のため働きながら東北大学大学院教育学研究科を修了。修論のテーマは「進学校における高校教員文化及び価値観に関する研究」。2026年4月より現職。国語科。「全国女性進路指導研究会」ほか7つの有志勉強会の事務局担当。大学入試学会唯一の高校籍理事。



浦和高校(埼玉・県立)
進路指導主事

菅野治虫 先生

かんの・おさむ ● 全国有数の進学校である浦和高校に赴任して11年目。担任、学年主任を経て2025年度から進路指導主事を務める。生物科教員として、実教出版の高校教科書『生物基礎』『生物』の執筆に携わる。共訳著に『歴史を変えた100の大発見 生物』(丸善出版)。

た対話ができている証だと感じます。保護者の影響も大きいですが、プラスに働くことが多い反面、過度な期待が生徒の足枷になる場面もあります。

石川 私も進路指導主事時代に行ったアンケートで、親の影響の大きさを感じています。学費や生活費を負担するのは保護者ですから、親の意向や経済的な事情は避けて通れません。

菅野 本校の場合、教員以上に影響を与えるのが「先輩や仲間」なんです

が、皆さんが指摘するように、親の期待や関与が強すぎることで自分の考えを十分に表せずに苦しむ生徒もいます。そこで入学前の説明会で保護者に、ご

子息の自立に向けて親離れ・子離れを意識していただくようにお伝えしています。3年間、保護者を交えた三者

面談は行いません。自分の進路は自分で決めるということを重視するためです。その代わり担任と生徒による「二者面談」を年5回設け、自分自身に向き合えるよう伴走しています。

延沢 「先生と十分に話し合えた」という生徒が多い背景には、探究活動やキャリア教育など、授業以外で生徒と向き合わざるを得ない時間が増えたこともある気がします。管理職としては、先生方に負担を強いる形になり心苦しいですが、生徒の納得に繋がっているのなら報われたと思います。

ただ最近、生徒と教師の関係が、話しやすさが重視される水平関係になつていくケースが多いことが気になります。私は高校教育のプロとして、ある種弱毒化した垂直関係を保ちなが

ら、必要な情報や体験を意図的に提供し、最後は自分で決めるよう背中を押す関係でいたいと思っています。

データを活かすために現場でできること

藤田 ありがとうございます。最後に改めて、データを教育現場にどう活かせばいいか、お聞かせください。

石川 学校の中で完結する教育は今の時代限界で、それと同じくらい、世の中を知る機会、社会と繋がる機会を学校がもたなければと思います。データも大切ですが、多くの高校は、その地域と一緒に生きているわけで、先生方自ら地域に踏み出し、地域参画の仕組みや、人と人を繋ぐ関係性をつくるのが重要だと思いました。

菅野 改めて、データを受け取る側の解釈が大切だと思いました。本日議題となったデータも、編集部が何らかの意図をもって提示されたわけですね。そういう意味では恣意的と言えなくもありません。世の中に情報はあふれ、多くの人はわかりやすいデー

タに飛びつきがちということも含め、情報やデータの背景にある意図を読み解くリテラシーを、生徒も教員も身につけなければと感じています。

梅北 社会はますます複雑になり、誰も正解がわからないから、わかりやすさを求めてしまふのかもしれないですね。進路指導の立場として、世の中の動きを知っておく必要があると思うとともに、そうした社会の複雑さを、変にわかりやすくすることなく、そのまま、複雑なんだよと生徒に伝えるべきだと思いました。あと、大人がもっと生き生きと働く姿を見せることが大切だとも。例えば理系人材を増やしたいのなら、大人がその世界の面白さをもっと示すべきだと感じました。

延沢 考えてみれば、データというのは公表された時点で過去のものなんですよね。がんばって調査し、分析しても公表する間に、どうしても時間が経過してしまいます。一方で、私たちが日々向き合っている生徒たちの生の実相は、今そこにしかありません。それでいて学校という場は未来志向で動いています。過去のデータを基に、未来を見ながら、目の前の生徒に対して、思考や対話のきっかけを提供し、未来の社会の同志として共に考える教師でありたいと思いました。

受験は大事。進路も大切。けれど、
そのために高校生活を犠牲にしない